

海坊主の回想記

軍手

丘に上がった海坊主

何かと作業するには便利な手袋である。

陸仕事にも海仕事にも、特に私のか弱い(繊細な?)手には必需品だった。

サンゴや魚やイセエビなどは、棘やヒレなど危険がいっぱいである。それから少しでも手を守ることが出来るからだ。

軍手というと普通は白いメリヤス製で、左右の無いどちらの手にも使えるものが思い浮かぶだろう。しかし、結構種類があって、素材が頑丈だったり布製では無い物だったり、握り部分にゴムなどで滑り止め加工がされたものなど、多種多様である。石垣島で海人をしている時にも、かなりお世話になった道具で、一番寿命の短い道具でもあった。

電灯潜りの習い始めは、イーグン(手鋸)を握る手(右手)には、軍手を使わず、素手で握っていた。軍手をしていては、ゴムを引いて魚に狙いを定めるまでに、イーグンが滑ってしまい、逃がしてしまうからだ。

魚突きだけなら、用は足りていたが、夏のイセエビ漁になると“素手で”ということは考えられない。なぜなら、リーフの上を歩き回っている奴を、手づかみで獲ることも多かったからだ。素手で獲ろうものなら、手はズタズタに切られてしまう。人によっては、二枚軍手をする人もいた。

そこで、使われ始めたのが、握る部分に黄色いゴムのイボイボがたくさんついている“滑り止め付軍手”だ。どこの世にも、そういう物を見つける名人がいるもので、いつの間にか皆が使い始めていた。

それと同様にイーグンの柄も、竹からグラスファイバー製(釣り竿の様な物)になって、

耐久性も滑り具合も一段と向上していった。しかし、この滑り止めは効果絶大で、少々握力が鈍(にぶ)ってきても、手鋸ゴムの引(ひ)っ張(ば)り力(りょく)に十分耐えてくれた。

ところが、困ったことがおきた。なぜだか、この軍手では、魚は握れないのである。全ての魚がウナギのようにヌルヌルと滑って逃げていってしまう。魚を握る左手には、布製の軍手がどうしても必要になってくる。

そこで不経済なことが起こってしまうのである。布製のものは、左右のどちらでも使うことが出来るので無駄がないのだが、滑り止め付は、左右があるので、片方は新品のまま使われずに無駄になってしまうのである。

まあ、細かい話ではあるが、その無駄が結構心に残るものである。

そんなある日、市内の大きな資材屋(ここに行けば、何でもそろ)に行った時である。最高にいいものを見つけたのだ。なんと両面に滑り止め加工されている軍手(左右の無い)が売っていたのだ。

思わず“そうだよ！これだよ”と叫んでいた。大げさだが、心の棘が一つ取れたような気がした。

その晩の仕事では、皆が「上等さ！どこで？」と、軍手の話で大盛り上がりだった。もちろん、その晩は大漁だった。

もし、電灯潜りの人を見かけて、左右手袋が違っていたら、

“そういうことか”と、思ってください。

けっして、余りものを適当に使っているわけじゃ無いと。